



新萬葉集卷三中心の花同人の歌

三月號批評と鑑賞

四月 曙 會

藤波會の記

十一日會記事二則

四月の横濱歌談會

浪穂會第二十九回詠草

席題「母」

源氏物語雜筆

内山眞龍翁歌集散抄(其の一)

眞間手兒奈

種々なること

「あかり」に關する短歌

新刊紹介

東西南北

滿洲だより(續)

印東昌綱氏還曆祝賀會と筆蹟(寫眞版)

朱實會……………五三

……………五六

……………七五

……………九八

……………一〇二

……………一〇三

……………一〇五

山口直藏……………一〇六

澤口眞沙夫……………一〇八

高橋保……………一一六

小林一郎……………一二二

……………一五六

……………一五七

……………一五七

高橋刀畔……………一五八

小川町の思ひ出

佐佐木先生は、まへ／＼から竹柏園の古い時の事で私の覚えてゐる数々を書いておく様と度々仰せられました。今はそのまゝにして長い事たちました。今は先生も、もうそんな事は少しも仰しやらないのですが、あまのじやくな私は、今頃になつて一寸かいて見る氣になりました。更にもう一段のあまのじやくな事には、先生が見せよとも何とも仰しやらないのに、お目にかける氣にさへなりました。

一番はじめの小川町のお家には、一度小學校のかへりに道をき／＼一人で伺つたことがあります。まだ光子刀自も昌綱様もお國元にいらしたので、大先生と今の先生とがどこかの歌會にお出になるそのお留守居に姉があがつてゐましたので、母からいひつけられてあとから私もいつたのでした。

小川町通りの小川亭といふよせの横町を、駿河臺の方へ入ると、ぢきに左側に低い土手があり、その土手の上に四つ目垣が結つてあり、何か細い枝の木がたわ／＼と植えてありました。それについて左へまがるとぐり門のあるお家がそれでした。門をあけ、格子の處までゆきましたら、姉がお玄關の間にお机を出して、大先生のお手本をお手習してゐました。姉はお留守

橘糸重

居の中にお清書をし、その上に歌を何首とかよんでおくやう大先生の御いひつけだと、一所懸命になつてゐました。

それだけ覚えてをりますが、其の時大先生たちが御歸りになつた事や、自分達がどういふやうにしておいとまをしたかは、ちつとも覚えてをりません。

それから光子刀自と昌綱様とが御上京になり、もつと大きいお家へおひきうつりになりました。前のお家のちき近くで、やはり小川町一番地でした。これが即ち竹柏園の方々になつかしい「小川町時代」といふ名のお家となつたのでした。母が提灯をさげて、私の手をひいて暗い横町をまがり「たしかこ／＼ちやつた」といひ／＼ゆきますと、暗闇からも足音がしたと思ふとたんに「お／＼おさちさん」と仰つたのが光子刀自で、昌綱様のお手をひいてゐられました。お二人で「五十様」の縁日においでした。それでも私たちの爲に引かへして下さり、母は十疊のお座敷で、色々お話をしてをりました。昌綱様は切角の「五十様」がおそくなるのにお怒りもなさらず、「こま」などまはしてごきげんよくしてゐられました。

多分その時、大先生も今の先生もいらしたのでせうのに、それは忘れてしまひました。

(右二項は今考へますと、明治十五年の末あたりか、十六年のはじめあたりと思ひます。)

(此處數年相たち申候)

其の後毎月十一日の月次歌會に、母や姉が伺ふやうになりましたが、いつからか私も時々母の腰巾着であることとなりました。十疊のお座敷の四方ぐるりにお座蒲團が並べてあり、その真中にひくい臺がおいて、その上に新しいお短冊がのせてありました。(兼題や當座の歌をかく爲めでありました。)そばに細長い重硯の箱がおいてありました。お床の間の鴨居に「當座何々、競點何々」と書いた紙が貼つてありました。大先生はほどよい處へお机をすゑて、そこにいらつしました。兼題のお歌や當座のお歌をおなほしになる爲で御座いました。母が不参加する時など、私はよくお手傳ひをするやういひつけられて、少々早い目にあがりました。細長いお重硯の箱を一つづつお座ぶとんの前へおき、水入から少しづつ硯の海へ水をついでおきます。だん／＼お客様が見え、おさぶとんがふさがつてゆきます。大先生のお弟子様や、まらうどさねの松平春嶽公や東久世通禧伯、小出繁様、鈴木重胤翁など、女の方々は、鶴久子様、中嶋歌子、松の門三姉子様、大野定子様など、また西舛子様、竹屋雅子様などは、やはりお弟子さんで御座いました。此のま

いたします。歸宅して母に色々報告をしますと、おあとかたづけのお手傳ひはどうしたのかと叱られました。「先生があまりおそへおそくのこと」ならんうちおかへり」と仰しやつたからとすましてをりました。

大先生の還暦のお祝は、兩國橋のほとりの井生村櫻といふのでおにぎやかに行はれましたが、私の家ではをりから母が病氣になつて床にをり、姉も一寸留守で御座いましたので、私はほんのお祝にだけあがり、お手傳ひもろくにせず、お座敷のおもやうを一寸拜見いたしただけで歸宅いたしました。

大先生御逝去の翌年、神田の大火がありました。其の頃は今の様に自動車ボンブがうなりをあげてはせてゆくなどいふ事はありませんでした。萬世橋そばの消防署(場所は今と同じ場所ですが、建物はもつとずつと貧弱な)の火の見櫓で三つばんの半鐘をけたたましくうつのがきこえました。戸をあけて見ますと、どうも小川町、佐々木先生のあたりが御近火らしいといふので、其の頃家にとまつて居りましたいとこ達がかけ出してゆきました。私達はどうであらう／＼と見てゐましたが、夜のしら／＼あけにいとこの一人が足袋はだしでかけもどつて來、大變な大火で、佐々木先生ではすつかりお片付けになり、今まで皆でお手傳ひしてゐたが、幸ひ風向がかはつたので、お家は大丈夫といふだけ見とどけて來たのだと知らせしてくれました。びつくりして姉と二人急いでお辨當をこしらへ、お見舞にかけつ

らうとさねのおいでになるのは、一月の發會と十二月の納會でした。

皆様は兼題のお歌を短冊に書いて、中央のお臺におき、そして當座のお歌を考へてゐられます。私などコンマ以下は「競點」はよまんでもえ／＼から當座だけよむやう」と仰つて下さいますが、中々よめませんでした。そのうち時がたつて披露がはじまるからと呼ばれて、それまで遊んでゐたお茶の間からお座敷の隅の方へ出てゆきました。大先生が少しお座をおすゝめになり、短冊臺におむかひになり、今の先生がおそばから短冊を一枚づつとつておあげになります。大先生はまづその日の兼題を、「何々といへる事を」とおよみあげになり、その詠者の名を「誰々」とおよみあげになり、(まらうどさねのお方々の名は、誰々の君と仰られました)それからゆつくりと抑揚をつけておよみあげになりました。(一寸謡曲のやうなふしで)詠者は歌の前後におじぎをします。順をおうて出席の方々のがすみますと、大先生が御自分のをおよみあげになります。此の時一同はおじぎをいたします。それから競點の天地人をおよみあげになります。その點者は、その日御出席のまらうどさねのうちのおひとりであつたやうに覺えてをります。

それから皆様おくつろぎになり、發會納會にはお酒が出、お膳が出、例月の會にはおそばが出、あちらこちらでお話はずんだり、お短冊臺の當座のお歌や何やを御覽になつてゐる方々もあります。一しきりあつて、だん／＼と皆様がお歸りになりますと、私もお茶の間でおそばをおちさうになり、おいとまをけました。今の様に非常線など張られませんので、人ごみをぬけておきにあがる事が出来ました。お二階へあがつて見てまづ驚きました事は、一夜のうちに見わたす限り焼野原になり、あちこちに土蔵がポツ／＼残つて居りましたが、それが時々フーツと火をふき出し、がら／＼と崩れるなど物すごいけしきでした。

前夜、火がせまりました折に、光子刀自と昌綱様は駿河臺の方におのがれになり、今の先生は、「お家に火のつくまでは」と、大先生の御肖像の額を持つて御門の處を守つていらしたのださうです。其の時はうちのいとこたちも御一緒にいたのださうですが、幸ひ、風向がかはり、御一同ホツとなさつたのださうです。私達があがりました時は、まう光子刀自も昌綱様もお歸りになつてゐられました。やはり其の時お見舞にいらした大橋博文様が、日本橋の方があやふくなつたといふので急いで歸られた事を覺えてをります。この大火は、水道橋際からはじまつて、ずつと神保町、小川町、鎌倉河岸などやきはらひ、一時しづまるかと思えたのに、更に火がぶりかへして日本橋の方へのびたのでした。何しろ大へんな大火事でした。

それから竹柏園は、今の先生が奥様をおむかへになりました、園主となられました。大先生のお弟子さんであつた方々も、ひきつづき今の先生におをしへをうける事となりました。故大塚楠緒さん、富田愛子さん等もさうでした。私は、ずつと御無沙汰をしてをりましたが、或る時先生がいらして、少し又歌をよ

みませんかと仰しやつて御著書を下さいました。私はまた恥か
がやかしく、のこ／＼あがるやうになりました。日曜の午前に
皆の爲め源氏物語の御講義があり、其のあとで一週間の勞作歌
七八首を直していただきました。大塚さん、富田さん、大橋時
子さん、島田隆子さん、同愛子さん等、少しおくれて吉田廣子
さん(今の片山さん)、長谷川時雨さん、同松子さん等々。

午後からは男の方々のおいこでした。川田様がお弟子入り
をなさいました時は、たしかさういふ日であつたやうに思ひま
す。安藤直方様と仰しやる方——これは私もお顔だけは知つて
をりました。——が、中學の制服を召した方と御一緒にいらし
て、その方は「あとで紹介するからね」と仰つて、お玄關脇の
四疊半(大先生時代から場とおひならはしの室)へはいつて
いらつしやいました。私はお講義を伺つてゐても、いつも氣が
散つてゐるのですから、そんなことも横目で見てゐたのでせ
う。その時の中學の服を召していらした方が川田様と、あとで
わかりました。

竹柏園は多士濟々としてにぎやかに、男の方では、石榑千亦
様、小花清泉様、三浦守治様、横山碩様、小原頼之様など、女
の方では、大塚楠緒様、峯百合子様などで、一か月一度づつ研
究會がひらかれることになりました。いつも記録係をして下さ
るのが石榑様でした。研究會とは申すものの、少しは茶目氣分
もまじり、批評をひきもどす爲めに、奇抜な歌も出て、時々檢
事格の横山様、辯護士格の三浦様、審判の先生などと、中々面

竹柏園は西片町へおうつりになり、ます／＼さかんになりつ
つあります。私はここで一寸考へて見ます。昔ながらに「心地
こそすれ」とか、「なりにけるかな」とか、何千年一日の如く、
(但しとぎれ／＼に)一つ處であしづみをしてゐますが、氣が

(一頁よりつゞく)

謎の詩集だなどとも評されてゐる。全篇百五十四章の一部は「美
少年」に、一部は「黒婦人」に言ひかけの形式になつてゐるが、
排列の多少錯綜した疑惑はあれど、とにかく局部々々が連作風
に出来てゐる。坪内博士も「わが短歌の連作式といつたやうな
風に云々」と説いて居られる。



白い事がありました。或時「音」といふ題が出ました時、
ただ一人座禪堂の裏に寂としてふりつむ雪の音をきくかな
といふのがよみあげられました。色々評がこんぐらかりました
時、審判官の鶴の一聲「イヤナ歌也」といふので作者も苦笑し
てゐられました。

ゆきすぎぬ又ゆきすぎぬ小夜ふけて母まつ門の小車の音
といふのが御座いましたが、大勢の評は可憐なる歌といふのに
一致いたしました。或方が、「その母不品行ならんにはますま
す可憐なり」とつけ加へられましたので、その作者は、ひどい
ひどいといつてをりました。「涙」といふ題で、

かうほねのやせたる花に一しづくおけるやなにの涙なるら
む

といふのがありました。「ことさらにかうほねといはずもがな」
といつて、いつまでもくす／＼と笑つた方がありました。作者
は「かうほねは一寸考へたつもりであつたが」といつてゐられ
ました。評者は、「河骨(皮骨)ならやせてゐるにきまつてゐる」
と、地口流に氣をまはして笑はれたのかとあとで思ひあたりま
したが、しかしこれは評者の心を更に氣をまはし過ぎた事かと
も、又氣がつかまりました。川田様、長様など、さういふ夜、一高
の寮からいらして門限におくれぬやうとお歸りになつた事を覺
えてをります。新井洗様もやはりその頃からさかんに勉強をし
てゐられたと思ひます。

(此の處又々數年相たち申候。)

ついであたりを見ました時は、周囲は森閑として人つ子一人見
えなくなつたやうです。はるかのはるかあなたの方へすゝん
でゆかれた人達のあしあとだけが、私のそばに残つてゐるので
御座います。

私は今「連作」に關聯して沙翁のソネット集を引用したが、
精しく其の原詩を味讀したなら、短歌人諸氏の貴き参考にもな
り、益する所も存外に多からうと思ふ。沙翁は如何に短詩を取
扱つたか、又いかに短詩の連作を實行したか、そんな事を知ら
むが爲にだけでも一讀すべきは翁のあの詩篇である。